



第 十 卷 七 月 號

□或る人は「こんなに急がしいのに念佛なんかする暇はない」と云ふ人がある。乍然そんな人にこそ、その實は念佛が必要である。少くとも私共には急しい時に限つて念佛の大切なのが痛感される。

□今日の念佛は昔の人の念佛のやうに、閑人の念佛や老人の念佛はない。寧ろ今日に急がしくて、將來に發展しやうとする人にとつてこそ、むしろ念佛は必要である。

□何となればこんなに急しい時代であり、何事につけ思ふやうにならぬ時代であればこそ、反て人生を深く反省して、少しでも無駄のない人生を確かりと送らねばならぬからである。

□それには色々の方法もあらうが、先づ第一には人生の慰安所と活動の源泉が要る。何となれば人生の慰安所がなくては心から思い切つて安らぐの所がなく、又活動の源泉がなくては今日の人生では眞に働くの力がないからである。

□此の意味からして、凡そ人生の生活の中、未だ宗教ほど、此の二つの要求を私共に與えるものはない。而して、その宗教の中、この本願の念佛ほど私共に眞に二つを與えうるものは無い。

□だから、私は世の識者に言たい。凡そ世に未だ眞實の道に生きずして、人生の慰安を得ず、又凡そ此の世に於て、眞に活動の源泉を持たないものはよろしく、我等の念佛に來たれと。

□私共の念佛の世界はすべて疲れたるものゝ慰ふところであり、またすべてのものゝ働く生命の源泉であるからである。(念)

生きてゐる宗教

昔の武士は、自分の主君が悪逆の君主だらうが、その君の馬前に打死することを、無上の忠義と心得た。

昔の烈婦は懐劍逆手に、自分も吾子も共に自害して其最後を潔くすることが、無上の龜鑑と誇つた。

而し今の世には、生活苦のドン底に、缺食兒を抱へながらも、生活難に戦ひつゝ行く者、必ずしも女丈夫でないとはせぬ。又身自ら軍部を鞭撻し、政府を彈劾する武人をも、勇士でないとせぬ。

斯ういふ世の中に宗教も、いつまでも宗教家の持ち物などとは考へられて居らぬ。妻子を持たず、算盤をはちかぬ者のみを聖僧だとは心得ず。宗教の宗教でなく、非宗教の宗教が、過去の宗教に取つて、代つて、眞の宗教たらんとしてゐる。

新時代の宗教とでもいはふか、いや宗教は常に新時代を造つてゆくもので、新しき宗教を造つてこそ、眞宗教と謂ふべきであります。

見よ、樹は年々に古葉を去つて新しい葉を出す、葉の恰好は同じようでも、決して一つものではない、年々に進化して行つてゐる。「活きてゐるモノ」は斯くの如きである。進化の葉は何年経つても更はらぬ。而し彼れは「死んで」ゐる。

「活きてゐる宗教」は今や庶民の宗教となつて、正しい自覺生活の共同發展となつてゐる。(尅)

目次

活きてゐる宗教 尅 子

努力と樂天 尅 子

謹んで全國の同志に告ぐ 土屋親道

眞生會座談の夕(一)

古今の十方衆生より 長圓寺

入信の動機と心境の變化 根來忠太郎

全國眞生同盟規約草案

支部通信

天 樂 と 力 努

信仰のある人は、常に努力家であります。

何故かといふと、大きな事柄にブチ當ると、事柄が大きければ大きい程、妙に馬鹿落付きに落付くものです。だから突嗟の場合に、此場合どうしたらいいか……斯々せよう……といふ決心がつくものなのです。だから其決心ついた方へ一生懸命やつて行く、そして又障礙が出来や、其障礙を何とか乗越す方法を立てて行く、そして次から次へと、忙しく事變に應じて應急の努力を拂つてゆくから、徒らに泣いたり喚めたりしてゐる暇がない。時々愚痴が起つて來たり、腹が立つて來たり、悲しくなつて來たりするのは、屹度心にスキのある時で、茫然自失して「なぜコンナ事が出来て來たのか知らん——」と過去の手落ちを悔んだりして、決して前途に向つて回轉の努力を拂つてゐる時ではありません。信仰の人は常に前途を見に行きます、過去を見ない。過去の失敗を觀ても、それを將來の希望の中に振込んでゆく、だから失敗を取り戻す努力を燃やす油になるのです。

これに反して信仰のない人は、事に突當る度に途方に暮れて、たゞ嘆いてゐる、たゞ過去を思ひ返しては「あゝすればよかった。斯うすればよかったのに——」と現實と過去との間を、幾度も行き返りしてゐるだけで、少しも將來へ對しての希望や努力の一步を持たぬ。だからますます「難局がもつれ

つて、暗い心持になつてゆくだけです。

暗い心の中からも明るくし、力の出ぬ中からも力を出さして下さる——ソレが信仰です。而し、ソレハどういふ譯でそんな勇氣を湧かすのか。といふと、ソレハどんな不幸な場合、どんな困難な場合にも何かしらん我々の胸の底には「必ずよくして行つて下さる——必ずよくなつて行く」といふ豫感があるからです。コレが信仰の正體でせう。

だから事態がどんなに悪化して來ても、決して悲觀せない。悲觀しても必ず悲觀の中に一分の樂觀がある、此の樂觀が苦難のドン底にも餘裕を造り、此の餘裕が回天の努力となるのです。

だから第二に、信仰者は常に樂天家であります。發明家だらうが、或は學者、軍人、法律家であらうが、信仰ある人は常に樂天的努力家であります。(尅子)

謹んで全国の同志に告ぐ

土 屋 觀 道

□各地の道友には御障りもありませんか御案申して居ります。それにしても、私の廻つた各地の道友は此の不況にもかゝらず、割合に元氣でゐられるのには一安神いたしました。之全く如來の慈光に浴してゐられるからだと思ひまして、信仰の力のいかに現代に必要なかを一層感ぜさせられました。何となれば信仰なき多くの人々は今日の不況の爲めに殆ど死んだやうな姿であるにかゝらず、道友の各位が此の力の中に活動してゐられるからであります。

□或る人は私共の集りを單にブルジョア階級の集りかに見てゐる人もあるさうです、中には私共の話を丸で無産者運動の集りかのやうにさへ見てゐる人もあるとの事です。私は此の二つの話を聞いて獨りでおかしくなりました。何と云ふ面白い二つの見方であることよ、物も見やうでかくも違つて見えるものか全くあきれる外はありません。乍然今日のやうに働いてさへ食へない世の中に、悠々と念佛などしてゐるものを見たときに多くの無産者階級の人々から、私共の集りをブル階級のやうに見られるのも亦無理からぬことだと思ひます。乍然それではさう云ふ人達が果して此の世にだけだけの働きをしてゐるか、仕事もなく徒に遊んだり、無汰な時間に半日を送ることはないでせうか。

□私はそんな人に話して見てたい。念佛は必ずしも急がなくて仕やうのないやうな時間を特に費さねばならぬと御勧めするものではない。乍然若しも一日中、半時間でも、一月中一夜の暇でも若しあるならばその時間で結構である、それを本當に念佛にあつたらどうかと云ふのであります。念佛は暇人

が申すと思つたら大間違ひ、暇な人なら念佛申さんでもよいのです。暇の無いやうな人なればこそ、一夜の時間を念佛にさいて、一時間の半分を念佛に使つてくれと云ふのです。何となればそんな人の念佛にして始めて、人生の眞意義にも觸れ、價値ある生活ができるからです。念佛は眞に活動の源泉であり、又すべての安慰の根本であります。

□それと共に、私共の集りが無産者の集りのやうだと云ふ人に對しても更に一言を呈したい。何となれば私共の集りは決して、無産者のみの集りではなく、更に多くの有産者諸君もそれに加つてゐるからです。けれども、私共の集りが無産者の集りのやうに見ゆると云ふならばそれも亦無理からぬことと思ひます。何となれば私共の集りは如來の慈光に合掌した人類が此の世にどうして生きて行くかと云ふことを共に語つてゐるからであります。さうした話の中には眞に價値ある人生をいかにして此の土に現はすかと云ふことが常に語られてゐるからです。従つてそこには何等貧富の區別もなく、たゞ働く人のみが尊いことを語るからです。

□私達は一日の休安も、單なる安らぎの休安でなくして。又働かんが爲めの休安でありたいと願つてゐる。御佛の前には遊ぶもの必ずしも尊いものではありません。常に多くの世の爲めに自らを献げた人々の働きこそ、眞に私共の尊むべく、又學ぶべきことであります。徒に法を喜び、法を尊むと云ふことは必ずしも佛教の教ゆるところではありません。たとへ教へのすべては知らなくとも、たとその中の一でもよい、之を聞き之を信じ、之を實行する人のみこそ、眞に道を聞き、道を喜び、道を信する人と云ふべきです。いかに道を聞き、道を喜び、道を樂しむ人とても、これを信じて之を實行にまで現はさぬ人々は未だ眞に道を聞いた人とは言へません。

□此の意味から云へば私は全国の道友と共に今少しく念佛を實際の生活に望め、社會と共に眞に生きるの必要がないかを思ふものであります。

眞生會座談の夕(一)

題、「宗教の實際化に就て」

時 昭七年五月二十日 午後七時半より

所 南鑛治屋町 渡部善兵衛氏宅

司會者 堀 榮 二氏

集會者 土屋觀道。渡部善兵衛。同一家。高羽。三輪。新原。川崎。伊藤。同婦人。棚橋。同若婦人。本多氏御夫婦。崇徳寺。古賀。百々。並河。中川。尾上。西脇。澤田。渡邊。その他の諸氏併せて三十名許り。

一同合掌

司會者 今夕、渡部さんのお宅で吾々同志が集つて色々寛いで坐談すると云ふことは眞に嬉しく思ふのであります。私共グループ全體を通じて、腹藏なく意見をドン／＼吐いて下さつて、益々その道を研究さして頂くことが出来るならば、非常に結構だと思ひます。名古屋に居ります吾々共は、どうか協同一致して、共に一ツ、強く進み、明く進みたい。さうして朝がに宗教に關する修養をさせて頂きたいと思

ふのであります。併乍ら各自、各々職業を持つてをります。忙しい仕事に携つてゐるのでありますから、充分時間ありませんが、一月に一度乃至二度は斯ふ云ふ催しに出て参りまして、お互にドン／＼とお話を致しまして、最後に上人様に判定して頂く、其處に良い道が啓けるのではないかと思ふのであります。今夕の話題は「宗教の實際化」！ 宗教を本當に頂いたことであれば、之を日常生活に應用して見なければ價值はないものと思ひます。そのやうな

意味からお話を願ひたいと思ひますが、實際、宗教と云ふものに對しましては、自分の修養であるから、段々と修養して行きますれば、夫が體で自分の日常生活に織込まれて、宗教が間に合つて行くことが事實だと思ひます。さう云ふ點から、恐らく眞生同盟、婦人向上會に携はる人々が、どんな風に宗教と云ふものを實際化してゐるか、と云ふことを知りたいと思ひます。これは逆も大きな問題でありまして、これが判れば非常に良いと思ひます。忙しい仕事をしてお出でになると云ひますが、併し多少の暇はあることゝ存じます。それでさう云ふ信念で、宗教を生して行く方法が有りさうに思はれます。それで、斯ふ云ふ問題に就いて、皆様が暫の間、自分は宗教をこんな具合に握つてゐる、自分は斯う云ふ場合には斯う云ふ風にやつて行くと云ふやうな、そのお話をして下さいを切に希望する次第であります。問題はヤ、コシイが、宗教の實際を日常生活に織入れてさうして自分が、満足して暮して行かうと云ふこと、そう云ふ期かな有る方法があるならば、一ツお願ひ致します。申し遅れましたが、私が暫くの間、司會を致しまして、お取次ぎを致したいと思ひます。判定は上人に願ひます。話を絶間なく

進ませたいと思ひます。どうぞ、さし當り斯ふ云ふやうな問題に非常に、御造詣が深いのは古賀先生だと思ひます。古賀先生が見られた宗教はどう云ふのか。お願ひ致します。

古賀清一郎氏(岐阜)堀先生にかゝつては敬ひませんハハ就いては御指名を受けましたから、一寸申上げます。私の胸中を申上げさせて頂きますと、エー今迄この年になります迄、かなり色々なこと、色々な話も承つてゐるのでありますが、併し夫だけは耳で一通り聽分けは出来るやうな心持が致して居ります。けれ共實際に、自分の事に當りますと、どうしても自分がいつも承つてゐることのやうに運びません。矢張結果はどうなるかと云ふと、自分の都合の良いやう始末を付ける。さうして後からあれはいけなかつた、あゝじやなかつたと思ふ。一ツの事柄がありますと、どうも自分の時は自分の計らひで形付けて、後からハアアあれはいけなつたなあーと、後悔して居ります。人から相談を受けると、よく出来るが、自分のことになると、矢ツ張自分の具合の良いやうにする。私の生活は夫を繰返してゐるのであります。それが自分には辛い、それでは木當に自分が立てない、所が私自身が少し、それこそ犬養さんでは

ないが、心境が變りました。どう云ふ具合に變つた

かと云ひますと、物事を二ツ並べて考へて、せなければならぬことをせずに、總で自分の都合の良いやうにすることが詰りは辛くなりました。云ひ換へれば、自分が人様の前で叫ばして頂くのが濟まないやうな氣になりました。今迄は濟まないやうに思つても、自分で許してやりましたが、此頃はそれが私に出来なくなりました。云ひ換へれば自分は皆様の前に出て、特にお話ししなければならぬことがあつても、苦しい感じを以てしては、どうしても出来な

司會者 さう云ふことは、自分が話さんとする心持の上に、非常に堪へられない。恐しく感ぜられるやうになりました。夫で、此頃の心持では、自分がこの叫びを叫び、凡有る事の上に、それが一番恐しい感じになつて居ります。之だけは、私の心持が昔と變つたと思つてゐると云ふことを申上げて、をきます。

司會者 さう云ふ體驗で云はれたことは、實に吾々にも響きます……。次は私は日頃常にお説を承る度に、氣に入つてゐると云ふと何んですが、素直にお話下さつて心良く思つてをります渡部さんに、この方が宗教に對して日常生活に如何に取入れておられるかと云ふことをお話し願へば、大變都合が良いと思ひ

ます。

渡部善兵衛氏 だしぬけにどうも……、モット外の方で

司會者、或は株の方から見られた宗教、或は年の方から見られた宗教、株などで面白いお話を持つておられると思ひますが、是非どうぞ。併し強いは致しませんから。

(笑 聲)

渡部善兵衛氏、私は自分の得意なことは喜んでお話をさせて頂く場合が多いのです。けれ共徹底してをらん事を、さう云ふ方のお集りの所で述べることはどうも何ですなあ。ヒツ込んで行つてしまつて、出て來んのですが。……私の心持で求めてゐること、淋しいやうな、何とも云へない心持で求めてゐることの切なることは、日夜絶えませんけれ共、併し夫も、浮世とでも云ひますが、現實の職業の方に追ひ立てられて、今ではその方が勝つてをります。併し、自分は茲七八年の間に、段々判らして頂いて、進歩して來る積りで居るのです。けれ共その中に何かと、皆様に聽いて頂けるやうな徹底した所はありませんでこの邊の所で外さんの方へ。

司會者 併しなんですね、宗教をズーッとおやりにな

るやうになつてから 毎日の激務に對して、處置を

爲さることが早くなつたとか云ふことはありませんか。仕事の速斷が出来ると云ふことはございませんか。

渡部善兵衛氏、さう云ふことは無論ありますし、夫から一ツ、私の感じてゐることは、會社の仕事をすることにして、以前には自分の分つてゐることは、自分一人で一度に忽ちやつてしまつたりすると、仲々周囲から不平があつて圓くゆきませんでした。併しこの頃では、成可く人にやつて貰ふやうにしております。自分でやらなければならぬことは別ですが、向ふの人の意を伺つて見て、いやがつておられたらやるし、さうでなかつたら、やつて貰ひます。以前「ソウト」の氣分「ソウト」とは爭ふ、鬭ふと云ふことですが……。

司會者 ハー判ります。

渡部善兵衛氏、その争鬭の氣分になつて、自分に分つてゐることは、皆やつてしまつて、やつたやうな顔をしてゐると、次の人が仕事がなくなつてしまつて、仕事をとつてしまふと、不平が出ます。それを此頃では、自分のすることだけやつて、知つたやうな知らんやうな風をしてゐると何も云はれんで、非常に仲

がいいです。なあ。

土屋上人 さうですね。

渡部善兵衛氏、排斥すると申しますが、敵意を持つて、他の重役の方には力を入れるが、私には反抗するところがありません。併し信仰のお蔭で、さう云ふこともなくなり、ました。いやな事が起つて來ません。この事は店の方では左様感じませんが、會社の方で感じます。

司會者、こんなことはありませんか、貴方が信仰なさることによつて、商賣の相場が勝つたり、下つたりすることが、意識の内に見えるやうなことは……。

渡部善兵衛「それはまあ間違の方が多いやうですが、先月も少し立入つた話ですが、東新が百三十六圓迄落ちてゆきました。十二圓五十錢拂込んだ前が、百八十圓から百九十圓、二百圓近く迄、行つておつたのが、百三十六圓迄落ちたんです。皆が奮つて賣るですなあ、併しその日の悪材料で、今日は賣られなければならぬと思つておつたが、それが却つて跳ね返して來ました。あれ程下の方でコンクリートを固めたやうになつてゐる奴がです、私は少ししかやになかつたんですが、それでも呼吸が波打ち、胸が震へて百六十圓位になつた時にはどうなるかと、思つ

てをりました。皆随分投げました。この分では百四十圓から、百二十圓迄も達するかと思つてをると、途中で百四十圓に止まりました。何處迄落ちるかと思怖を感じて、澤川集つてゐた人がそれを見て、「先づなんだな、心配したことはない、肩入れが代つてしまつた」と云つてをりました。併し妙に私は、今日は此處がドン底だと直感すると、大抵それがと

まりで、今日は此處が頂上だと思ふと、矢張さうなります。相場と云ふものも、人の恐怖心や、安心を強く支配すると云ふことを、近來の中であの時位強くハツキリ感じたことはありません。相場と云ふことは分りもせん時にやるのがいいけません。やり損ふ人は分りもせんのに、やらすには居れない習慣が附いてゐる人に多やうです。(次號へつづく)

古今の十方 阿彌陀様へ

大阪 長 圓 寺

いろ／＼の花を摘みては西方の彌陀に供へて露の身を悔ひ、
ほどもなく夜晝見るに飽かぬかな寝ても覺めても釋迦彌陀の顔、
年を経て彌陀の淨土を願ふ身は人より先に後世や叶ふと、
契り置く彌陀の淨土の西よりは迎へて見せよ極樂の道、
利を知りて念ふ願の違はずば一念阿彌陀頼まるゝなり、
綿津見の底のいろくづ皆ながら救はんことを願ふ阿彌陀

は、
訪ねつるかひもあるかな西方の淨土の中に勝れたる彌陀、
長閑には更に思ふな有漏の宿念ぎて行かむ阿彌陀佛のもと、
惑ふとも南謨阿彌陀佛と唱へては命終らば導びけよえま、
深く只朝夕願ふ極樂の彌陀の淨土は見めやとぞ問ふ、
極樂は心からにてきはれず口に阿彌陀佛絶つなふしと

手を摩りて西に向へば釋迦彌陀も急ぎてよとぞ夢と示めて、
身を捨てゝ法を求むる輩は遂には彌陀の極樂に住み、
阿彌陀佛にそむる心の色にいでばあきのこすゑのたぐひならまし、
阿彌陀佛といふよりはかは津の國のなにはのこともあしかりぬべし、
なにわがた入りにし日をも眺むればよしあしともになむあみだぶつ、
阿彌陀佛とこゝろは西にうつせみのもぬけはてたるこゑぞすゞしき、
阿彌陀佛と十二ゑとなへてまどろまんがきねぶりになりもこそすれ、
千とせふる小松のもとをすみかにて無量壽佛のむかへをぞまつ、
阿彌陀佛と申すばかりをつとめてに淨土の莊嚴見るぞうれしき、
これを見んをり／＼ごとにおもひ出で南無阿彌陀佛とつねにとなへよ、
極樂もかくやあらましあら樂しはやまへらばや南無阿彌陀佛、

一聲も南無阿彌陀佛といふ人の蓮の上にのほらぬはなし、
釋迦阿彌陀おなじ教への一つ道呼ぶもおくるも誓ひたがふな、
たつ杣や南無阿彌陀佛の聲ひけば西にいざなふ秋の夜の月、
草も木も枯れたる野邊に唯ひとり松のみのこる彌陀の本願、
いそげ人彌陀の御舟のかよう世に乗りおくれなばいつか渡らん、
彌陀頼む人を空しくなすならば我れ日の本の神と云はれじ、
空海が心の中に咲く花は彌陀より外に知る人ぞなき、
死して後我身に添ふる寶には南無阿彌陀佛にしくものはなし、
南無といふ二字の内には彌陀をたのむこゝろありとはたれもしるべし、
みなひとのひととたのむといふならば彌陀はしりてやすくひたまはん、
ほれ／＼と彌陀をたのまん人はみなつみはほとけにまかすべきなり、

入信の動機と心境の變化に就て

根 來 忠 次 郎

私の家は先祖より眞宗を信仰して居りましたが、私は一向無信心でむしろお念佛を申す事などは馬鹿らしい様な心持で居りました。丁度十六才の秋ふとしたことから不治の病に犯され遂に死を覺悟する様になりました時、譬に云ふ苦しい時の神だのみで、神佛の力に依て病氣を癒さうと決心しました。其頃父が觀世音菩薩を熱心に信仰して居りまして、朝夕讀經の際に私も其後に座り、共に普門品を唱へ、勸められるまゝに寫經をしたり、淺草觀音堂へ千日詣の願がけなど致しまして、一心に信仰を始めました。斯くする事一ヶ年あまりで、私の病氣は見事快復致しました。其時の私の喜び、父の感激……たとへ様も無い程で、たゞ有難さ

に益々道に精進する様になりました。其當時よく知人に此奇蹟を話した序に昔壺坂の澤市と云ふ座頭が信仰の力で目の明いた話は嘘かや無つた、てな事を云つて、よく何も経験ない者から冷笑されたものでしたが、此時程最も純な心で信仰生活を續けた時はありませんでした。ところが中等學校も卒へ、追て佛教に關する書物を読み、又各宗の説教を聞き、淺學でありまして何もわかりませんでした。が、圖書館などに行き種々の經文などを見まして、疑問が起つて參りました。例へば經文其物がはたして釋尊のお説きになつた眞實のものか、歴史的に見る宗教の變化、所謂方便と眞實自力と他力の相違、人間死後の行動、益々複雑となる現

世に於ける因果關係の矛盾（正直者は馬鹿者扱にされ、弱者は何時迄も浮ぶ瀬も無き有様）等、數へきれない程ありました。とりわけかの大震災の時、私の姉弟が被服廠跡で焼死致しまして、あの無慘極まる六萬餘人の死體を見ました時、世人のよく云ふ前世の因縁として、單純に此不幸なる人々の死をかたづける事は出来ませんで疑問は愈々深くなつてまいりました。それでも信仰より離れず道を求めに附近の眞宗説教所へ通ひ、又た禪寺へ參禪した事などもありましたが、私の熱心がたりないせいか、何れも無駄でありました。偶々道友藤田保太郎氏と相知る様になり、土屋上人の事を伺ひ、聽講を諾れまして、昨年九月始めて例會に

出席致しましたが、上人の御講義は

一言一句實によくわかり何となく嬉しい氣持になりました。それ以來會を重ねる度に有益なお話を伺ひ、眞生の意義もだん／＼わかつてくる様に考へられました。しかし未だ念佛の眞價を味ひ眞の悟りを開く迄には到底参りませんが、何か心の奥底にある強い力の出来る事は事實であります。現に昨秋より短日月の間に失職、母の死、債務保證に依る莫大なる債務負擔等重なる不幸で精神的は勿論財政的にも非常な打撃を受けてまして、生來小心者の私は一時途方にくれかなり悲觀も致しましたが、再び心に鞭打ちまして此難局打開を志ざし進む事の出来したのは確しかに多少なり上人に伺つたお話が力あつたと感じました。今後は是非、眞生にいきて行きたいと思ひます。何卒道友諸氏の御引立を偏に御願申上ます。終りにのぞみ、此眞生會へ導

びて下されました藤田兄へ厚く御

禮を述る次第で御座います。

◎道友と異郷に遊びて

尾 上 銀 子

◎見も知らぬ里にしあれと御佛の法のゑにしそりかたきかな

◎よきにつけあしきにつけて思ふかなたゞ有難き法のみ佛

◎法のうた

後 藤 美 那 子

◎のりのこゑきかぬ人こそ憐れなれいきとし生ける身にもなき世に

◎みほとけの御手にすかる身にしあればたゞをきふしに御名を唱へむ

神 齋 善 之 進

◎南無とよび 阿彌陀ほとけにすかるよりほかにてたてのなきをのれがな

◎死もまかせ 生もまかせて こゝろから愚かながらに 苦樂ながらに

◎念佛のこゑ ほかからに たゞえつゝつきせぬ 恵みに こたへまつらん



◎眞生同盟規約草案

(四月行基寺で協議した草案です。)

- 名 稱 第一條 本會ヲ眞生同盟ト稱ス
- 目 的 第二條 本會ハ眞生主義ノモトニ各自ノ幸福ヲ増進シ社會ノ淨化ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 事 業 第三條 本會ノ目的ヲ達スル爲メニ左ノ事業ヲ行フ
一、講演會並ニ別時念佛會(此ノ名稱ノ可否ハ唐澤ニ於テ決定スルコト)ヲ開ク
二、社會事業ヲ行フ
三、文書刊行ヲ行フ
- 會 員 第四條 本會ノ主旨ニ賛シテ入會セルモノヲ本會員トス
- (但シ各地支部ヲ編成シ、支部ナキ地方ハ最寄ノ支部ニ屬セシメ、之等支部會員ヲ以テ本會員ト認メルコトトス)
- 第五條 本會員ニハ其人ノ希望ニヨリ會員章ヲ頒ツ但シ會員章ハ實費ヲ申受ク
- 經 費 第六條 本會ノ經費ハ各支部ノ贖出及寄附金ニ依ツテ之ヲ支辨ス
- 會 計 第七條 本會ノ會計豫算ハ總會ノ決議ニヨリテ之ヲ定ム
第八條 收支決算ハ毎年一回總會ニ報告シ其ノ承認ヲ得ルモノトス
- 役 員 第九條 本會ノ事務ヲ處理スル爲メニ左ノ役員ヲ置ク
總理一名 顧問若干名 主事一名 理事若干名
常任理事九名
但シ任期ハ各一ケ年トシ再撰ヲ妨ゲズ
- 第十條 總理ハ總會ニ於テ推戴シ本會ヲ代表シ一切ノ會務ヲ總理スルモノトス
- 第九條ノ顧問推薦ノ方法及職責ハ起草委員ニ一任スル
- 第十一條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第十二條 理事ハ全國ノ支部ヨリ各一名ヲ撰出シ一般會務ノ相談ニ應ズルモノトス

但シ撰出スヘキ理事ノ數ハ支部ノ情況ニ依リ總理ニ於テコレヲ増減スルコトヲ得ルモノトス

第十三條 常任理事ハ理事會ニ於テ推薦シ各自部門ヲ擔任スルモノトス

第十四條 本會ニ左ノ部門ヲ置ク
一、教學部 二、社會部 三、宣傳部 四、財務部
五、研究部 六、出版部 七、體育部 八、音樂部
九、情報部

總 會

第十五條 總會ハ毎年一回開催シ會務ノ報告ヲナシ併セテ諸般ノ協議ヲ行フ

第十六條 總會ハ各一ケ年トシ再撰ヲ妨ゲズ

第十七條 總理ハ總會ニ於テ推戴シ本會ヲ代表シ一切ノ會務ヲ總理スルモノトス

第十八條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第十九條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第二十條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第二十一條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第二十二條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第二十三條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第二十四條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第二十五條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第二十六條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第二十七條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第二十八條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第二十九條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第三十條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第三十一條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第三十二條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第三十三條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第三十四條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

第三十五條 主事ハ理事會ニ於テ推薦シ總理ヲ補佐スルモノトス

支部通信

□名古屋支部通信

東鮮樓上座談會

五月廿二日午後六時名古屋眞生會員並に婦人向上會有志相集つて晚餐會が舉行せられた互に献身的に會の爲に努力と誠意を捧げんと希望する人のみの會合故胸襟を開き始めは清らかな期らかな、如來を

中心とする話題で華が咲きました、確かに宗教會の一進歩である——食後會員堀榮次氏より四月幹事會にて協議した協議事項の報告且つは承認會があつた、件案中には土屋上人の御勢力を従來以上煩さなければならん事柄が澤山にありましたが、上人は常に賛意を表せられた事は會員一同の感激した處であつた、善は急いで六月より着々と實行する事となつた。幹事連の喜びは此上もなく至上の榮

光を荷ふた心地して思ひます合掌した。當夜出席者御氏名は食卓順に記しました。土屋上人、渡部善兵衛、渡部みさを、黒宮平八、澤田松夫、本田實三、本多志、黒宮英夫、青柳智月、黒宮翠江、棚橋がい、棚橋貴美子、森きぬ、加藤清由、伊藤留吉、西脇賢吾、堀榮次(以上廿名)座談會協議事項

眞生同盟名古屋支部は從來より堅實な

の發展を遂げつゝあるも、幹事一同は將來一層向上を計り、如來道の爲め人生を有意義に送る爲め、左の諸案を席上に可決し實行する事となつた。

協議事項(A) 會員増加案と方法

(一) 學徒組織をなし一定期間内に全國眞生同盟の主義並に綱領を教修せしむ。

(二) 勸行中にある經文を解説し講義をなすこと。

(三) 禮拜供養儀式作法等を正式に自修せしめ何人も導師として耻かしからざる修養を爲さしむること。

(四) 一般宗教的智識の啓蒙をなさしむること。

(五) 眞生同盟に加入、入信せしむる方法を研究並に聴講せしむること。

右の如く眞生同盟會員として必要なる智識を第一期生、第二期生、第三期生と漸次に教養し熱心なる信者を得ること。

上人への御願

(イ) 上人は從來の世話人並に會員を第一期生として必要なる教育をなし、眞生同盟の理想を充分に鼓吹し適當なる

時期に修了せしめ師範代理の出來得る準備をなすこと。

(ロ) 上人は第二期生即ち新しく入門する信者には比較的簡易なる宗教講演並に教課を與へ、趣味ある法話を爲し何人も喜んで入信する方法を講ずること。

(ハ) 上人は適當と認むる人々に此事業を分擔せしめ多人数の新會員を計劃的に教養する設備と方法を講ずること。

(以上)

協議事項(B) 毎月講演改良案

(イ) 毎月廿日の講演會は正時間に實行しプログラムの如く進行し實行するものとす。

(ロ) 講演と講演の間に音楽合唱をなし氣分の一轉を計ること。

(ハ) 會員中より若干名講演をなし趣味を興ふると共に有難き法話を聴講せしむること。

(ニ) 講演後人生苦を有する人々の爲に特に數分間づゝ時間の割愛を願ひ、上人の温情味ある宗教的御解決を願ひ而して敬慕の念を深からしむる事。

(ホ) 畫圖講演の別後には餘り御念佛の時間を澤山に入れざること。

協議事項(C) 夜間座談會の改善案

(イ) 夜間座談會は趣味の變換並に多人數に宣傳せしむる爲め會員の自宅にて舉行すること。

(ロ) 研究話題を豫め發表し會員をして豫備智識を作らしむること。

(ハ) 座談會に司會者を定め會の進行をなさしめ上人の結論を願ひ話題を了解せしむること。

協議事項(D) 御念佛會

(イ) 毎月廿一日の御念佛は午前中眞劍になし所謂念佛三昧となり同志が法悦を受くること。

(ロ) 社會事業の一助として宗教に多く觸れざる會社官署其他にて講演並に御念佛をなすこと但し午後時間を選ぶこと。

(ハ) 幹事並に世話人に對し上人は尙遠なる理想と宗教心の奥義を教授すること。

(ニ) 時々會食をなし會員相互が腹藏なき意見の交換をなし會の向上即ち吾人の發展を計ること。

の脩養を計ること。

(ホ) 會員相互にて講演會、座談會をも開催する熱心力を養成する方法として座談會に於て自己の信念並に意見を男女共に發表すること。

臨時決協事項

1. 六月二十日談座會は 尾上ぎん様御宅にて舉行すること。

2. 話題『佛を見る人』

3. 御婦人は世話人にて左記を準備すること。

イ、眞生と記せる提灯二個調製すること。

ロ、幕一張を新調すること但し協議の上實行すること。

ハ、新會員を澤山集めること。 以上

渡部善兵衛氏御宅座談會

大盛況(五月廿日午後七時) 久しく希望する會員宅座談會が今月は渡部善兵衛氏の御宅にて舉行せらるゝ事となつた、新緑の候廣々として居る庭園並に御座敷は全く開放され集る人々は愉快に極樂の別天地に集つた如き快感を覺

えた、上人の麗わしき御姿も拜せられ連記者も座を古め堀氏の司會にて座談は進行した、話題は宗教を實生活に織込む方法のあらは、

(イ) 宗教を毎日取扱つて居られます古賀清一郎氏の明快なる御話がありました。

(ロ) 御袈裟を掛けるご何んな氣持になる? 崇徳寺様から氣分が判然として心地が變るからよい、百々氏の御袈裟の體驗談、御上人の御袈裟談はあつた云ふ程進歩したものであつた。

(ハ) 御念佛に關して伊藤留吉氏から體驗談があり一同敬服して入信時代より今日に至る經過を拜聴した。

話は益佳境に入り何時止むとも計られん程澤山の話題と解答者があり尾上ぎん様中川五十子様柳橋がい様柳橋貴美子様の御高説を拜聴する事が出来た此間渡部様御夫妻の熱心なる御款待ありて拾時三十分散會した、嗚呼如來の道に生きる人の會合の美しさと思はす合掌した。

幹事 堀 榮次

合掌

座談會は速記録により他日御參考と供じ。 以上

燒津支部 五月

燒津支部では昨冬以來度々道友の集會を催し、その發展策を構じてゐたが、去る廿二日の集りには町の公會堂を會場とし、一般聽衆の爲めに「國家々難と宗教生活」と云ふ題の下に土屋觀道盟主の講演を開催した。時局多難の折から集る人も多かつたが、其の翌日は更に光心寺に於て道友幹部の集りを催し、會の發展策を協議した。特に各員が二つに分れて道友を勧誘することにたり、本年中に會員各一人が一人づゝの會員を作ること云ふ豫定のものに其の運動を開始する相談があつた。

東京支部 六月

去る四日の東京支部の集りは近來にない盛會であつた。都築氏御夫婦は定刻以前から見えて、専修念佛せられ、七時頃には已に多數の集りとなつた、講演は八時から始められた。盟主は光明禮拜儀の連續講話を一時間に渡つて話され、ついで越後の原吉郎氏(丁度帝國議會

開會中の事(東上中) 多忙の中をわ
ざ／＼參會せられ、先達への満蒙視察
談の二三を述べられ大きな參考を與えら
れた。又岩見次三氏は永年の研究になる
クリスト十字架の否定に關する發表講演
を致されて基督教の史的誤謬を指摘せられ
た。その他東岐の道友古賀清一郎中佐も
東上中の事として一二の信仰談を試みら
れた。その他今まで大垣に於て活動して
頂いた桑原省三氏の未亡人桑原よし子氏
も愈々東上之から東京の人として同志に
加つて頂くこととなり、今回から參會し
て頂いたので東京の支部ではそれこそ此
の上もない恵まれた會合であつた。集る
者三四十名全く其の本部も人を入るゝに
立錫の餘地もない程であつた。夜の十時
一應散會を宣したが、愈々一同の散會は
十一時を過ぎる程だつた。

【東京眞生報告 五月四日】

光明禮拜儀講話並に座談會

土屋上人宅において來會者廿餘名

夜七時より念佛、八時より禮拜儀の御

講話、

「無量壽如來の光明顯赫にして」より

「共に歡喜したまふ」こと亦また是の如く」ま
でこれによつて吾等のさるべき道につい
て正しく御教へ下さつた。

講話の後、座談會に移り、四月行基寺

の御別時に御參加された太田、山田兩氏

の御感話がありました。それは御念佛を

御義理にやつたり、無意味に思はれたも

のが御別時に參加して初めてしつくりと

御念佛が出来得る様になり、光明と歡喜

の生活を得た動機経路についての御話し

て求道のものにはきわめて參考になるも

のでありました。十日の徳壽院の念佛三

昧會及廿六日の座談會を深川都築氏方に

て聞くことなど申合せて散會。

五月廿六日、眞生座談會深川都築氏方來

會十七名午後七時土屋上人を導師として

御念佛に入り、八時修了の後、會員數章

の撰定に就いて御相談致しました。

神谷善之進氏の繪畫の御話は良心にふ

れた、感銘深いものでした。

六月四日、芝土屋上人宅にて開催

この日集りは全く豫想以上の集會でし

た。上人の禮拜儀の講話は引つゞき講ぜ

られ、その他代議士原吉郎氏の満蒙視察

談、東岐の中佐古賀清一氏の感話など
あり、又大垣の桑原省三氏未亡人の御上
京なごで衷心からの喜びでした。

【大阪眞生家族大會報告】

去 月拾五日第三日曜を利用して大阪

では眞生家族大會を開きました。眞生同

盟大阪支部會員及「光明」誌友の親睦を

はかり社會の單位たる家族が共に修養し

向上せんが爲でありました。

場所は天王寺區生玉寺町 長圓寺様

講師は土屋觀道先生 集まつた者は大

人子供合せて凡百廿人。神戸より鶴田様

藤村様がお見えになり、芦屋、箕面、堺、

尼ヶ崎等大阪近郊の道友の顔ぶれは殆ど

そろひ、遠く名古屋よりは渡部様が隨喜

せられる等嬉しくも有難き極みでした。

又何の因縁ありてか岐阜の古賀清一郎様

が偶然にも此日當地に立寄られ、大會の

催しを聞かれて馳參せられました。お天

氣は文字通りの日本晴、朝十時より始め

ました先づ宗教映畫「法然上人御誕生八

百年遠忌の實況」教育漫畫「法然上人御

一代紀等を上映お晝にはおすしの御馳走

になり、午後一時半より大人と子供とが

二部に分れまして、大人は土屋先生の講

演を拜聴し、子供は引續き教育映畫を見

ました。此日は新しい友も見えた事であ

り、時間も一時間半程でしたので先生の

お話も通俗的に分り易く、日常の生活を

捉へて宇宙の大道を明かにせられ、宗教

講話に経験の少ない人もよく理解出來た

喜んで居られました。後には新に出來た

眞生同盟の會員章について、徽章が即ち

眞理を表せる事を説明せられました。

小供の方も皆大人しく上田師のお上手

な解説を聞きながら終りまで行儀よく映

畫を見てゐるのには涙ぐましくなり、流

石は信仰ある家庭の子女だと感心させら

れました。

三時よりは模擬店開始。樹木、泉水の

配置よろじき廣い庭に紅白の帳幕を張廻

らし、赤い毛氈を敷いた椅子をあしらひ

脊尾様のお骨折になるみつ豆屋さおでん

屋が店を開きまして晴渡つた。青空の下

で各自隨意に頂きましてしきり舌根を

喜ばせ、四時になり紀念攝影を致しまし

た。最後は古賀様にお願ひして肉彈三勇

士のお話をして頂き、五時和氣露々の裏

に惜しくも此會を閉じたのであります。

三四年前にも此の様な催をやつた事が

ありましたが色々な事情の爲途切れて居

りましたのを、今度會則も新になり、大

いに眞生運動を進展せんとするに當り、

此催を復活しましたら長圓寺様皆様の

の御熱力により思つたより以上の好果を

修め有意義に終らせてもらひました。之

からは年一回位はかかる家族大會を致し

度いと思ひます。(大山生)

【大石支部報告 四月】

大石支部に於きましては、當他佛教團

主催の追悼會に際して、東京の神谷氏に

御講演を願ひまして非常に盛會でありま

した。

五月に入りまして、當地方に於て製茶

及春蠶が盛んに行はれます。そして秋の

收穫を了へるまで農家は非常に繁忙で、

到底ゆつくりと語り、念佛申す餘裕は殆

んどありません。強健な男子で一回の

養蠶に體重が一メ乃至一メ五百匁位減る

さいつてゐられます。

従つて例年農繁期は農業に關係のない

人を中心に五六人乃至十人位の集りが續

けられるのです。人數は少ないが、實に

熱心に念佛し、且つ信仰の問題、社會の

問題等を眞剣に論じ合ふのです。今月に

於ても十日と廿二日の兩度例會を催し

ました。殊に廿二日には久々河藝郡の

岩中氏も來られ、おそくまで語り合ひま

した。

廿一日は河藝郡の同志佐野英夫氏が鈴

木教授と御一緒に山田市の神宮學館中

學部一年生約三十名を引き連れ、北島神

社(吉野朝の忠臣北島親房を祀る)に參

拜の歸途、雨の中を大石不動院へ御立寄

りになりました。なつかしい同志がこ

うして訪問して下さる程喜びはありませ

ん。

永らくの間毎月の例會に、五里の道を

遠しとせず自轉車で馳つて下さる熱

心な同志があります。中でも松井、安田

の兩氏は永い間殆んど毎月缺席された事

がありません。この方々の熱心に私達

がごんに激勵されたかわかりません。

唐澤三昧會案内

時 七月廿三日より一週間（廿二日登山、卅日下山の事）

信州唐澤

導師 土屋觀道氏
「眞實の宗教」

會費は實費一日約壹圓、木魚、毛布、手拭、ハミガキ等御持参の事。二十日信州上諏訪驛下車、驛前の旅館にて休憩、夕方より登山、手荷物は同所より人夫にて運ぶ。

全國眞生同盟總會

時 七月二十五、六日午後、處 唐澤三昧會にて

協議事項左の如し。

- 一、今春行基寺での同盟規約の決定。
 - 一、來年度の發展策。
 - 一、會旗並にメタルの制定、その他。
- 願くは全國の同志よ人類の進歩と自己の發展の爲めに萬障を差繰つて御來會なご。

全國眞生同盟本部

誌代拂込者並寄贈者御芳名

○五拾錢 岐阜林重太郎様、○壹圓宛 津島 高木様、大阪 月江寺様、岐阜 堀もと様、太田悦次郎様、伊藤花子様、竹村清音様、河瀬音吉様、伊藤彌左衛門様、伊藤友三郎様、河瀬吉平様、松浦重三様、藝師寺様、和歌山 山本久野様、福岡 吉祥寺様、柏崎 會田軍治様、東京 山田肇子様、三重 齋藤ちよ様、鹿児島 柳元ハル様、○貳圓宛 東京 副島慎太郎様、岐阜 片桐照子様、尼崎 橋本信吉様、大阪 西池輝威様、藤枝町 櫻井謙友様、○參圓 名古屋 中野吉太郎様、○五圓 宛 東京 桑原よし子様、聖母 吉田國三郎様、岐阜 服部一男様、○拾圓 大阪 曾我尾昌治様

（大正十四年八月十三日）昭和七年七月十二日印刷納本（毎月一回十二日發行）第十一卷第六號
（第三種郵便物認可）昭和七年七月十二日發行

價定誌本

一部 金十錢 郵税共
半年 金六十錢 同
一ヶ年 金一圓 同

注意の文注

- 講讀希望者は代金を添へて御申込下さい。
- 誌代は總て前金御拂込の事
- 送金は振替によるのが便利

昭和七年七月十日印刷納本
昭和七年七月十二日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 編輯人 土屋觀道

東京市外濠谷町中通二ノ四二

印刷人 副島 慎夫

東京市外濠谷町中通二ノ四二

印刷所 丹丘舎印刷所
電話青山七五二番

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社

振替口座東京四七二八八番